

心動くままに

ボランティアと共生

私が障害者運動に関係していると、言ったときに「ボランティアですね」と言われたことがあります。私が「いいえ自分のことですからボランティアではありません」と答えると、「お金貰っているのですか」と返され、「いいえ」と言うと、「では、やっぱりボランティアじゃないですか」と言われました。

ボランティアとは無償の奉仕ということですが、「ゼニ・モノ」にとらわれている社会では、無償ということをゼニ・モノが払われるかということでボランティアかどうかと判断されるようです。

しかしそれは例えば、活動の中で何か精神的なことを吸収するという場合の問題や、活動自体に将来を展望した利害の追及、総体的利害の追及の問題がある、という場合それをボランティアということで表現できるのでしょうか。

私はボランティアという概念を理解できません。「無償の奉仕」をしている人にであったことが今までに一度もないのです。

例えば、ある宗教家がいて、自分でボランティアと称する障害者との拘わりをもっていました。そもそも彼は宗教の布教のために障害者と拘わっていたのであって、もっと言えば自分が天国の門に入るための善行を積むこととして障害者に拘わっていたのであって、悪い言葉で言えば、自分のために障害者を利用していることになります（ここで言う利用はギブ・アンド・テイクになりますが）、純粋にボランティアと見える人がいます、そういう人はたいてい自己満足的なかわりをしています。すなわち自分はいいいことをしているという名誉・評価を求めて活動しているのであって、決して無償の奉仕ではないのです。

私は何もボランティアを全否定するつもりはありません。最初正義感や自己満足的なところで、色々な活動に拘わる人がいて、それはそれで意味があるというよりは、むしろ最初はそのような拘わりかたが多いと思います。そういう形をとることはよくあるパターンです。しかしその最初の形でそのまま長続きしないこととして、ボランティアがあるような気がします。それがどういう形で転じるかが問題ではないでしょうか。

教育論で語られることですが、教育というのは一方通行ではない、教えるとは教えられることである、という提言があります。また良き「指導者」とは自分が指導するという人からより多くのことを吸収しえる人で「指導者」から脱しえた人が良き「指導者」である、という提言もあります。

そもそもボランティアにつきまとう「人に何何してあげる」という発想が私は嫌いです。そのことに上下意識一即ち差別的意識を感じとるからです。

ボランティアということで運動にかかわった人も、長く活動している中で、自分自身が逆に何かをより多く吸収しているということに気付くのではないのでしょうか、それは「ボランティア」ということを脱しえることではないかと思うのです。

障害者と健常者の間には「壁」があるとよく指摘されます。差別と被差別の「壁」とい

うことで、その「壁」はこえられないと言う障害者もいます。けれども私はこの人は越えている、と感じさせる人と出会ったことがありますし、そのような話も聞きます。

例えば、手話通訳者の「一般的には私が（聴覚障害者の）Aさんを助けていると思われるけど、私の同僚から『本当はあなたの方が支えられているんですね』と言われて、自分でもそうだと納得した」という発言や、被差別部落の識字学級で「字」を教えている先生が「自分の方がより多くのことを吸収している」という話。

障害者や被差別者に接するボランティアは最初「何何してあげている」というところから入って来ます、そして共に動き、共に生きるなかで、被差別の文化・生き様というようになことに触れ、互いに吸収しあうという関係になるのではないのでしょうか。

そのことが、共生という言葉で表現できることではないのでしょうか。
(S)

いじめ

からかい—差別の間の断絶・・・？—連続性（物象化と物神化の違い） いじめがない
—自虐ヘーペシズム・・・どう開くかが問題